

第6学年 音楽科学習指導案

に組 男子19名 女子18名 計37名

指導者 五代 香織

1 題材 音を聴き合って合わせようⅡ

教材 「思い出のメロディー」 深田じゅん子 作詞 橋本祥路 作曲

「ラバーズコンチェルト」 デニー・ランデル・サンダーリンザー 作曲 石桁冬樹 編曲（本時主教材）

2 題材について

(1) 題材の位置とねらい

この期の子どもたちは、これまでに第5学年題材「音を聴き合って合わせようⅠ」の学習で、歌声が重なり合う響きを感じて合唱したり、主旋律と和音、低音を合わせて演奏したりする活動を通して、歌声やいろいろな楽器の音が重なり合う響きを味わいながら、それらを生かした表現の仕方を工夫したり、鑑賞したりすることの楽しさを味わってきている。さらに子どもたちは、いろいろな楽器の音色や音が重なる響きの美しさ、旋律の重なり方の違いが生み出す曲想を感じ取りながら思いや意図をもって表現したいという欲求が高まってきている。

そこで、ここでは、各声部の旋律や音の重なりによる豊かな響きを感じ取りながら、表現を工夫する活動を通して、声や楽器の音色が重なり合う響きを聴き合いながら、声部の役割や楽器の特徴を生かして表現したりする能力を育てるとともに、声や楽器の響き、声部の役割に関心をもって進んで表現・鑑賞しようとする意欲や、**楽器の音色や旋律の重なりによって生まれる響きのよさを感じ取りながら、声部の役割を生かして自分の思いや意図をもって表現を工夫する能力を高めること**をねらいとして、本題材「音を聴き合って合わせようⅡ」を設定した。

ここでの学習は、音楽の構造におけるそれぞれの声部の役割や、声部同士がかかわることで生み出される全体の響きを感じ取って表現を工夫しながら合わせて歌ったり演奏したりする能力を育てる中学校の学習へと発展していくこととなる。

(2) 指導の基本的な立場

声や楽器の音色が重なり合う響きを聴き合いながら、声部の役割や楽器の特徴を生かして表現したりする能力を高めるためには、これまでに身に付けてきた表現の基礎的な能力を発揮し、互いの声や楽器の音を聴きながら、自分の担当する声部やそれぞれの楽器の役割を意識して表現することが効果的である。特にこの期の子どもたちには、目的に応じて合唱や合奏、重唱や重奏などの表現形態を選んで学習を進めたり、友達と思いや意図を共有しながら表現したりするを通して、音を合わせる喜びを味わうことができるようにすることが大切である。

具体的には、まず、「思い出のメロディー」を取り上げる。この楽曲は、同じリズムで和声的に重なる二部合唱になっており、互いの声を聴き合いながら表現するのに適している。また、旋律の音の動きや歌詞を生かして、歌い方の工夫をすることもできる。そこで、ここでは、歌詞や重なり合う旋律の特徴を生かしながら合唱する活動を通して、互いの声の重なりを感じ取りながら歌う楽しさを味わえるようにする。

次に、「ラバーズコンチェルト」を取り上げる。この楽曲は、「主旋律」、「響きをつくる旋律」、「響きを豊かにする和音」、「響きを支える和音」という声部の役割が明確で、各声部の楽器を選択できるようになっている。そのため、声部の役割や楽器の特徴を生かしながら、表現形態を工夫して表現するのに適している。また、1、2段目の旋律を反復、変化させた構成になっているため、子どもたち自身で旋律把握がしやすく、主体的に活動に取り組むことが期待できる。そこで、ここでは、**声部の役割を生かしながら表現形態を工夫し、自分の思いや意図をもって演奏する活動を通して、楽器の音色や旋律が重なり合う響きのよさや、自分たちにとって価値ある表現を目指して演奏する楽しさを味わえるようにする。**

このような学習を通して、子どもたちは、各声部の旋律や音の重なりによる豊かな響きを感じ取

りながら、目指す表現に向かって表現したり鑑賞したりすることへの意欲を高め、よりよい表現をつくり上げるために創造的に音楽とかかわっていかうとする態度を養うことができる。

(3) 子どもの実態（調査対象 6年に組 男子19名 女子18名 計37名）

本学級の子どもたちの実態は次の通りであった。

①	みんなで合唱したり、合奏したりすることは楽しいと思いますか。
	はい(36) いいえ(1)
②	その理由を教えてください。(複数回答)
	【「はい」の理由】 ・みんなで合わせたときの一体感や達成感を感じるから(17) ・技能が高まるから(12) ・友だちと学び合いながら学習するのが楽しいから(10) ・音楽が変わってその曲がもっと好きになるから(4) ・音楽の特徴や仕組みを理解して表現することが楽しいから(4) 【「いいえ」の理由】 ・リコーダーや歌が苦手だから(1)
③	いろいろな楽器を使って合奏をする際、それぞれの過程でどのようなことに気を付けて学習を進めますか。
	【楽器の選択】 ・旋律の特徴を生かした楽器(29) ・パートの役割を生かした楽器(5) ・分からない(3) 【旋律把握】 ・間違えないようにリズムや音の高さを確認しながら演奏する(20) ・楽譜に書かれた記号に気を付ける(13) ・同じメロディーがないかなど、曲の構成を確かめる(4) 【表現の工夫】 ・曲の感じに合った速さや強弱を工夫する(22) ・音量のバランスが取れるように人数や音量を調節する(14) ・分からない(1)
④	「翼をください」の低声部を歌いましょう。(教師が主旋律を歌唱)
	・正しい音、リズムで歌える(31) ・正しい音で歌えない(6)
⑤	「ファソラシド」の旋律をリコーダーで演奏しましょう。
	【なめらかに】 ・できる(28) ・できない(9) 【短く切って】 ・できる(29) ・できない(8)

①②から、多くの子どもが声や音を合わせて歌ったり演奏したりする楽しさを感じている。一方「好きではない」と答えた子どもの理由として、技能面の不安が挙げられた。

また、③から、ほとんどの子どもがそれぞれの学習過程において、どのような観点で学習を進めればよいか考えをもつことができている。しかし、楽器選択の際、パートの役割に着目することや旋律把握の際、曲の構成を生かすことに着目している子どもは少ない。

④から、ほとんどの子どもが旋律を正しく歌うことができる。一方、正しく歌えない子どもの要因として、別のパートにつられたり、変声のため、高音域が出しにくかったりしていた。

⑤から、リコーダーの基本的な奏法は概ね身に付いているが、運指やタンギングに課題が見られる子どももいた。

(4) 指導上の留意点

ア 課題把握・課題追求Ⅰの過程では、互いの声が重なり合う響きのよさを実感し、進んで活動に取り組むことができるようにするために、どのように歌っていきたいかという思いや意図をもたせ、それらを実現するために必要な表現の工夫を話し合いながら表現する場を設定する。その際、パート内における配置を工夫したり変声期の子ども自身が納得する歌い方を模索したりするなどして技能差に配慮する。

イ 課題追求Ⅱの過程では、声部の役割を考えながら全体のバランスを工夫して表現できるようにするために、既習内容を生かして声部の役割に気付かせることで、楽器選択の根拠を明確にもたせたり、旋律の反復や変化に気付かせることで旋律把握の助けになることを実感したりできるようにする。さらに、演奏の構成表を用いて、表現の工夫を視覚的にとらえさせたり、互いに聴き合う場を設定したりして、自分たちの意図した表現方法を客観的に思考できるようにする。

ウ まとめの過程では、表現した結果だけでなく、そこに至るまでの考え方や学習の進め方についても振り返る場を設定し、自己の高まりを実感させるとともに、新たな学習への問題意識をもつことができるようにする。

3 目 標

- (1) 声や楽器の響き、声部の役割に関心をもち、進んで音楽活動に取り組むことができる。
- (2) 楽器の音色や旋律の重なりによって生まれる響きのよさを感じ取りながら、声部の役割を生かして自分の思いや意図をもって表現を工夫することができる。
- (3) 声や楽器の音色が重なり合う響きを聴き合いながら、声部の役割や楽器の特徴を生かして表現することができる。

4 指導計画（全9時間）

過程	思いや意図を連続・発展させる心の高まり	教材	主な学習活動	教師の具体的な働きかけ
課題把握	どんな曲なのか。	思い出のメロデー①②	互いの声を聴き合って合唱しよう。	○ それぞれの旋律を正しく歌うことができるようにするために、ハーモニーキーボードを活用したグループ学習を取り入れる。 ○ 思いや意図をもたせるために、縦書き歌詞を準備し、気付いたことを話し合う活動を取り入れる。 ○ よりよい表現への課題を明確にするために、試しの合唱を基に成果と課題を出し合う。 ○ 課題に応じた活動ができるようにするために、それらに対応できるような場を設定する。 ○ 自分たちが取り組んできたことが次なる学習でも生かせるようにするために、本教材での課題を解決するために明らかになったことを共有し、他の領域（器楽・音楽づくりなど）や教材曲でどのように生かせようか問う。 ○ 既習内容との関連を図るために、パートの役割について話し合う際は、これまでに学習した合奏曲を想起させるようにする。 ○ 主体的に学習に取り組めるようにするために、音楽ソフトを用いて様々な楽器の組合せを必要に応じて体験できるような場を設定する。 ○ 様々な演奏形態に対応できるようにするために、グループ編成は、1グループ8～10名程度の人数とする。 ○ 思いや意図をもって演奏できるようにするために学級共通の課題と、各グループの課題を設定させる。 ○ 演奏を構成する楽しさを味わうことができるようにするために、自分たちで演奏の構成を決定させて旋律把握をさせる。 ○ 自分たちの表現の状況を把握しながら活動を進めていけるようにするために、演奏の構成表を活用したり、互いに聴き合う活動を取り入れたりする。 ○ 意図する表現になっているか、より客観的に思考させるために、他グループからの助言の他、自分たちの演奏の映像を視聴できる場を設定する。
課題追求Ⅰ	2つのパートが美しく響き合うように合唱したいな。 曲に込められた思いや意図を大切にしながら合唱してみよう。 今度は自分たちで創意工夫して歌ってみよう。		○ 範唱を聴いて感じたことや気付いたことを話し合い、どのように歌っていきたいか思いや意図をもつ。 ○ 旋律把握をする。 ○ 2つの旋律を合わせて二部合唱をする。 ○ 相互発表・鑑賞する。 ○ さらに表現を高めていくための方向性を話し合う。	
課題追求Ⅱ	今度は複数のパートからなる合奏だな。前の学習が生かせそうだな。 主旋律が生きるようにするには、音量のバランスに気を付けることが大切だったな。楽器を選ぶときの観点になりそうだな。 曲の特徴や構成が生きるように楽器の組合せを工夫しよう。 他のグループのアドバイスを生かせそうだな。	ラバースコンチェルト③④⑤⑥⑦⑧⑨	○ 2パートが美しく響き合う合唱にしよう。 ○ 前時の方向性を基にして、自分たちに必要な活動や技能を話し合い、試行する。 ・ パートに分かれて音程を確かめる活動 ・ パートの人数を調整してバランスの取れた演奏を模索する活動 等 ○ 相互発表・鑑賞する。 ○ 効果的だった活動や、必要な技能について共有し、まとめの合唱をする。	
まとめ	自分たちの目指す表現に近づいたぞ。		○ 曲の構成や特徴を生かして、主なふしを演奏しよう。 ○ 範奏を聴いたり、楽譜を見たりして、曲の構成や特徴を話し合う。 ○ 主旋律（①）を階名唱し、リコーダーで演奏する。 ○ 各パートにふさわしい楽器を選び、音色や響きを生かして演奏しよう。 ○ ②～④のパートの役割を話し合う。 ○ どのように演奏したいかを共有する。 ○ 担当するパートと楽器を決め、前時で確認した曲の構成を生かして旋律を把握する。 ○ 音色を確かめながらグループで合奏する。 ○ 相互発表・鑑賞し、次への課題をもつ。 ○ (例)・各パートのバランス・楽器の音色 ○ 互いの音のバランスを考え、パートがひき立つ演奏にしよう。(本時) ○ グループで解決したい課題に基づいて試行する。 ○ 相互発表・鑑賞し、試行して効果的だった方法を共有する。 ○ よりよい表現への方向性を確認する。 ○ よりよい表現になるように練り上げよう ○ 中間発表で出た意見を基に、よりよい表現になるように練り上げる。 ○ グループでこれまで工夫してきたことについて確認し最終発表に向けた準備をする。 ○ 響きの違いやよさを感じ取りながら発表・鑑賞しよう ○ グループ発表会をする。 ○ 学習のまとめをする。	

5 本 時 (6 / 9)

(1) 目 標

楽器の音の響きや声部の役割に関心をもち、意図した表現になっているか確かめながら自分のパートを演奏したり、友だちの演奏を聴いたりすることができる。

(2) 本時の展開に当たって

本時では、方向性の決定を目的とした学び合いが重要であると考え。そこで、前時に行った相互発表・鑑賞で得られた課題や、他グループで試行して効果的だと感じられた方法を共有する場を設定し、自分たちのグループの表現に必要な活動や技能を明らかにすることができるようにする。

(3) 実 際

過 程	主 な 学 習 活 動	時間	教師の具体的な働きかけ
課題把握	1 共通の課題を確認し、グループの課題を確認する。 ＜共通の課題＞ 互いの音のバランスを考え、パートがひき立つ演奏にしよう。	(分) ↑ 7	○ よりよい演奏を目指そうとする意欲をもつことができるようにするために、前時の学習で得られたグループの課題を確認させる。
課題追求	＜グループの課題（例）＞ ・ 曲の特徴である「なめらかさ」をどのパートでも実現したい。 ・ それぞれが自分のパートに責任をもって演奏できるようにしたい。	↓ ↑	○ 自分たちの課題に応じた活動を適切に判断できるようにするために、前教材の学習で効果的だった活動や必要な技能を提示する。
表現の工夫	2 課題をもとに、グループで活動する。 演奏する人数が減るときは、主旋律がもっと引き立つように、もう一つのパートの音量をおさえたらいいよ。 途中でずれてしまうよ。主旋律が遠くにいて聴きづらいからかな。主旋律がみんなの中心になるように配置したら、聴きやすくなるかもしれない。	28	○ 課題に応じた活動ができるようにするために、それらに対応できるような場を設定しておく。 ○ 自分と自分以外の演奏者との関係を把握し、聴き合う意識をもたせるために、演奏の構成表を活用する。
相互発表・鑑賞	3 相互発表・鑑賞し、意図した表現になっているか確かめる。 【取り組んだ課題例】 ・ 演奏がずれる。 ・ 聞こえないパートがある。または、音量が大きすぎるパートがある。 ・ 十分に演奏できない部分がある。 【試行した方法例】 ・ 主旋律が聞こえるように配置を変える。 ・ 息づかいやばちを変えてみる。 ・ パートごとに確認する。	↓ ↑	○ 目指す演奏に近づいているかという視点で互いの演奏を聴くことができるようにするために、共通の課題である「4パートの音量のバランス」がどうだったか、「各グループの課題」は解決に向かっているかという視点を確認する。
まとめ	配置を変えると、拍の流れを感じ取りやすくなるな。自分のグループでもやってみたらよさそうだな。 4 学習のまとめをし、次時への見通しをもつ。 ・ 自分のパートは演奏できるようになったから、次は4パートのバランスに気を付けて合奏したいな。	↓ ↑ 10	○ 目指す表現に到達するための方向性を明らかにするために、意図した演奏になった理由や、そうならなかった原因をたずねたり、「どのように演奏したら意図した演奏になるかな」と発問したりして、必要となる活動や技能を共有する場を設定する。 ○ 次時への方向性を明らかにするために、相互発表・鑑賞で出された意見や、成果を整理して、今後練り直していく課題を明確にする。